

令和6年度 園評価

I 経営の重点に関わること 評価段階 A：大変よくできた B：概ねよくできた C：あまりできていない D：できていない

重点目標	評価指標	園評価	改善策（来年度の具体的な取組目標等）	園 評価
夢中になってあそぶ	子どもの「夢中スイッチ」を見つけ、そこからの子どもの関わりについて考え適した対応をしている	「夢中になるのはどのような場面なのか」を見つけることで、子どもたちの興味関心を捉えることができた。 子どもの発想や興味を大切に、必要に応じて子どもの持っているイメージと一緒に形にしたり、玩具や素材を用意したり、環境を変えたりと子どもの姿や場面に応じて適切な対応をこころがけた。 子どものあそびが発展するような関わりや、あそびに集中できていない子への対応については、今後も検討していく。	各年齢の発達段階や興味に応じた適切な支援をしていく。 各年齢にあった素材や、試行錯誤できる環境について検討していく。そして、取り組んでみたいと思えるような意欲を喚起する環境を構成し、充実感や達成感が味わえるようにする。 あそびに集中できない子への対応をさらに検討し、適切な援助方法を考えていく。 毎日の保育の中で得られた気づきや子どもの姿を積極的に共有し、子どもの育ちについて、保育者間で話し合う機会を増やし、子どもの発達を一緒に見守りながら支援する姿勢を強化していく。 PDCA サイクルを活用しながら、改善につなげる。	B
	意欲を育む環境を用意している	子どもの興味や関心を抑え、子どもが夢中になってあそぶことができるような保育室の環境づくりをしたが、育てほしい姿を予想しながら環境構成をすることは不十分だった。 もっと、子どもが何を面白がっているのか、不思議に感じているのか探ることが足りなかった。		B
	夢中になって遊ぶ経験を通し見られた姿を、職員間で共有している	子どもの姿や援助の方法を、日々の保育の中で共有できた。しかし、もっと深く子どもの今後の育ちを語り合うことはできなかった。 公開保育や園内研修を通し園全体で他のクラスの子どもの成長を喜んだり、子どものあそびを見取ったり、環境構成について話し合うことができた。		B

II 施設の機能に関わること 評価段階 A：大変よくできた B：概ねよくできた C：あまりできていない D：できていない

大項目	中項目	評価指標	園評価	改善策（来年度の具体的な取組目標等）	園 評価
1 こども園における教育及び保育	(1) 0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもたちが主体的に活動できる環境について考え、これまでの経験を踏まえた環	子どもが主体的に活動することを意識し、子どもが自ら選択して遊べるような環境が用意できた。また、年長年中組は子どもと話し合いながら活動をすすめることができた。 「6年間通しての育ち」を意識することは不十分だった。	各年齢の発達段階を理解し、育ちのつながりを意識して、どの時期にどのような生活が展開されるか等の発達の節目を探り、長期的に発達を見通していく。 進級時には丁寧な接続を意識し活動、担任の思い、子どもの育ちを次年度担任へ伝える。	B

		境を用意する			
	(2) 一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	家庭において環境が異なることを理解、職員間で情報を共有しそれぞれの家庭に合わせ対応する	それぞれの家庭環境を配慮しながら、必要に応じて個別で対応し、職員間でその内容を共有することを大切にしました。 送迎時、保護者からの悩みや相談をうけた際は、職員間で内容を共有検討し、丁寧に対応するようにした 担任以外の保育者への共有や、外国にルーツをもつ家庭への丁寧な支援に対しては、不十分だった。	それぞれ家庭環境が違う事に配慮し、個々に合わせた対応を行う。 送迎時の担任以外の職員から保護者への伝達方法や情報共有の仕方を検討する。 外国籍の家庭に対しては、継続して丁寧な支援を行う。	B
	(3) 環境を通して行う教育及び保育	子どもが「次はこうしたい」という思う気持ちを大切に、遊びの展開に合わせ環境を用意している	子どもの発達の少し先を見越して環境設定する事で次にしたいあそびを上手に見つけられるようになった。しかし、クラスによりまだ子どもの遊びの展開に合わせた保育環境が不十分と感じる。	園内研修の中で、子どもの年齢、発達に合った適切な玩具や素材の研究を継続する。 子どもの遊びの展開を予測し、見通しをもって保育の計画をしていく	B
2 安全管理・指導	事故防止・防災	自ら行動するよう意識し訓練を行っている	訓練では状況を予測し、自ら冷静に行動し、安全を確保する努力をした。「こういうときにはどうするのか」子どもにも自分で考えられるよう、声掛けをした。 職員、子ども共に訓練に慣れ、危機感が薄れている。	訓練に関しては職員も落ち着いて行動できたが、慣れがでてきているので、再度危機感を持てるよう、事前に訓練日を伝えずに行う回数を増やす。また、BCP の内容を再検討をしていく。 ヒヤリハットの提出、共有、改善の方法を再検討し、定着する。	B
3 保健管理・指導	健康教育の充実	うがい、手洗いの大切さを繰り返し伝え、習慣化するようにしている	看護師が各クラスでうがい、手洗いの重要性を伝える機会を設けた。保育者も繰り返し声掛けする中で習慣化できている子もいるが、中には習慣できていない子もいる。	来年度も看護師による手洗い指導を継続し、手洗いが習慣化できるようにする。	A
4 特別支援教育・保育	支援体制づくりの推進	落ち着いて過ごせる環境を意識し、設定している	ケース検討会、研修会等での環境設定に関するアドバイスを活かし、その子にあった支援を模索した。その結果、その子が落ち着いて過ごせるよう環境づくりができた。	ケース検討会の内容を職員で精査し、ケース検討会の内容が気になる子の支援に繋がるようにする。 家庭と連携し、スモールステップで進めていくことを継続していく	B
5 組織運営	組織体制の充実	各職員が役割に責任を持って子どもへ関わり、協力しながら保育を行う	それぞれ責任をもって役割を全うしようと努力している。特にクラス、学年ごとでは連携ができています。しかし、常勤、契約パートと雇用形態により考え方が分かれてしまっている。	各職員が役割に責任を持ち子どもへ関わり、協力しながら保育を行うことを意識する。 職員間で共通の意識を持ち子どもに関わる。 分掌担当者が半期で進捗状況を会議内で報告し、今後	B

		うことを意識している		の方向性を決めていく。	
6 研 修	研修体制の充実	目標を持ち研修や講義に参加し、資質向上に努める	園内研修では、少人数制での研修を実施、グループワークの時間を設けた。短時間で参加者を入れ替えて行うなど、多くの職員が参加できるようにした。 公開保育は普段の子どもの様子が見られるよう配慮しながら行った。事前・事後研修は充実した内容になるようにした。 職員が企画、進行する研修会を行い、研修を進める側、受ける側の視点に立つことができ学びが多かった。	職員の年齢や経験年数に応じて学びを深める研修カリキュラムを作り、研修を行う。 職員一人ひとりが自分の個性や強みを活かし、主体的に活躍できるような活動をする。 職員が主体的に参加できる研修会をおこない、職員一人一人が前向きな気持ちで参加できる方法を検討する。	B
7 教育・保育環境整備	教育・保育環境の充実	子どもが試行錯誤できる環境を用意している	子どもの姿に沿った環境づくりや十分試行錯誤できる環境を意識した。	試行錯誤ができる環境を提供するために、職員間で保育を語りながら学びを続けていく。また、玩具や素材の種類、量、配置の仕方等検討し、より良い環境を作り上げることを目指す。	B
8 家庭との連携・協力	家庭への支援機能の充実	日々の園での様子を様々な方法で分かりやすく伝えている	降園時、その日にあったエピソード等伝え、保護者との信頼関係を築いていった。 コドモンアプリで子どもの様子を写真で分かりやすく伝えるよう、ドキュメンテーションを配信した。	保護者への対応は、今後もそれぞれ家庭環境が違うことを意識して丁寧な対応を心がける。 ドキュメンテーションの製作は今後も研修をしながら、充実した内容になるよう努める。	B